

アニマルウェルフェアの世界的動向と持続可能な動物生産

新 村 毅

(東京農工大学農学部 〒183-8538 東京都府中市幸町 3-5-8)

Shimmura, T. (2024): Global Trends in Animal Welfare and Sustainable Animal Production

All about SWINE 65, 3-5

1. はじめに

動物福祉（アニマルウェルフェア）とは、肉食やペット飼育といった動物の利用を許容しつつも、動物の生存中の生活の質を高めようとする考え方である。動物福祉は、国語的には動物の幸せとして、科学的には動物の状態として定義され、ストレスなどの不快を減らし、喜びといった快を増加させることにより、動物の状態、すなわち動物福祉を向上させることができる。動物の状態は、5つの自由（Five freedoms）と呼ばれる5つの観点から評価され、中でも動物が有している正常行動を満たすことが重要な課題となっている。

動物への配慮の思想にすぎなかった動物福祉は、現在、欧米などで法律として具現化されている他、国際基準などが制定されるなどグローバルスタンダードになっている。動物福祉には、家畜種ごとに様々な課題があり、ブタでは妊娠豚のストール飼育が、ニワトリでは、採卵鶏のケージ飼育が批判的となっている。今回は、これらに焦点を置いて、家畜の福祉の概要について記述することとし、詳細については参考文献を参照にしたい。

2. 飼育システム

バタリーケージとは、針金でできたニワトリ用のケージであり、ストールも鉄パイプでできたブタ用の枠場である。これらの飼育システムは、いずれも生産性が高く、衛生状態や温度管理が容易であることから、導入が進み、洗練されてきた飼育システムである。一方で、ニワトリにおいては、巣箱で産卵する、止まり木に止まって休息するというニワトリ特有の行動欲求が、ブタにおいては鼻を使って探査行動（ルーティング）をする、他個体と社会行動をするというブタ特有の行動欲求が満たされないため、動物福祉上の問題を抱えている。ニワトリの放し飼いや平飼い等のケージフリーと総称される飼育システム、ブタのフリーアクセスストール等のストールフリーと総称される飼育システムは、1つの広い空間の中に、巣箱や止まり木などの資源を設置することで、行動の自由度を高めたものである。しかし、ケージやストールとは逆に、活動量の増加により生産性が低下することは避けられない。したがって、ケージフリーやストールフリーの畜産物の価格は一般にケージやストールと比較して高くなる。

完璧な飼育システムは存在せず、どの飼育シス

テムにも一長一短がある。しかし、正常行動発現の自由に焦点を置いた形で、ケージからケージフリーあるいはストールからストールフリーへの急激な移行が生じている。EUでは、バタリーケージや妊娠豚ストールは2012年に法律で既に禁止となっており、ケージに止まり木などを設置したのも禁止となり、ケージフリーの方向に向かっている。米国では、食品企業などがケージ卵の購入を停止するなど、マーケット依存的にケージフリーへの移行が進んでいる。一方、日本では90%以上がバタリーケージやストールであるものの、動物福祉の消費者の認知度は低い。また、生卵などの日本特有の生食文化やアジアモンスーン気候で病原菌が増加しやすい側面もあり、衛生状態に劣るケージフリーやストールフリーが本当に日本にも適合的な飼育システムなのかは、まだ検討の余地がある。

3. 持続可能な動物生産における動物福祉

持続可能な動物生産とは何かを明確に示すことは、まだ容易ではない。少なくとも、ケージなのかケージフリーなのかという択一的な選択ではないこと、また、国によって異なるニーズに見合った生産体制を構築することは重要であろう。例えば、飢餓をゼロに（目標2）が優先事項である場合は、生産性の高いケージが適合的な生産体制になりうる。一方で、人の健康（目標3）や環境負荷（目標15）を考えた場合は、ケージフリーにも利点がある。例えば、動物福祉、すなわち動物の状態の向上により、餌に混合して給与する抗生物質の量を大幅に減らすことが可能になる。それにより、薬剤耐性菌が発生するリスクを減らすことができれば、人にとってより安全な畜産物を供給することができる。

では、日本の動物福祉はどういう方向に向かう

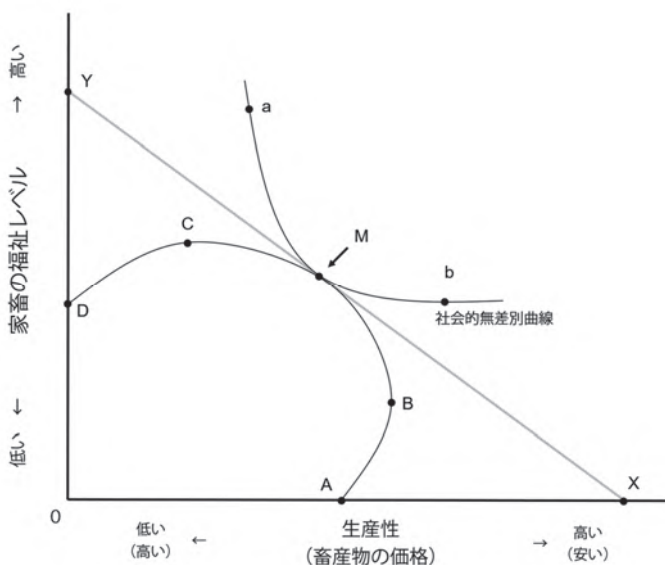


図1 家畜福祉と畜産物の価格の関係性

べきなのだろうか？動物福祉は多様な要素を含有したものであるため、それを明確に示すことは容易ではないが、方向性としては次の2点が重要と考えられる：①各飼育システムの最適化を目指すということ、②ケージフリー等の高度な福祉的飼育システムで生産された畜産物を望む需要に見合うよう供給を最大化する。図1は、経済学的に家畜福祉と生産性（畜産物の価格・価値）との関係性を示したものである。1つ目の段階は、点Aから点Bに向かう段階で、家畜福祉と生産性の両方が向上するというものである。すなわち、既存システムの最適化や精密管理により、家畜福祉と生産性の両方を向上させることのできる段階が存在し、それが点Aから点Bの段階と言える。2つ目の段階は、点Bから点Cに向かう段階で、家畜福祉が向上するものの、生産性は低下し、畜産物の価格（価値）が高くなるというものである。

これは、採卵鶏のバタリーケージからケージフリーへの移行を想像すると理解が進むかもしれない。ケージフリーのように、採卵鶏の行動欲求を満たす環境として止まり木や巣箱などを導入することにより、福祉レベルは向上するが、それらの資源の導入コストの他、活動量の増加による産卵率の低下、単位面積あたりに収容できる羽数（飼育密度）の低下などにより、全体として生産性が低下することは避けられない。したがって、2つ目の段階は、需要と供給のバランスを考慮し、その需要を最大化する点（供給量）に向かうことで、社会における純利益を最大化できると考えることができる。

文献

1. 新村 毅 編 2024. 動物福祉学. 昭和堂.